

「 私たち教会の使命 」

イザヤ書  
使徒行伝

第49章 5節～6節  
第1章 1節～11節

説 教 本庄侑子牧師

使徒行伝は教会の始まりを記します。『使徒』とは『遣わされた人』、名付け親は主イエスです。つまり使徒行伝は、使徒たちが計画し、行ったことの記録ではなく、主イエスが彼らを遣わして行われたことの記録です。著者ルカは福音書において、主イエスが地上でなさったことを書き記しました。使徒行伝は、その先の出来事を伝えるために記されました。

宛先は福音書と同じく「テオピロ」。どんな人だったのか正確には分かりません。大切なことは「テオピロ」という一人のために書き記されたということです。テオピロは、主イエスについては一通り聞いていたようです。しかし、信じる所に至ってためらっている。そんな人物だったのかもしれない。

始めにルカは、福音書の最後と同じく、復活の主が40日間、地上に現れたことを記します。期間が1日2日であれば夢幻とすることもできたのかもしれませんが。しかし40日も続けば、復活を認めざるをえなくなったことでしょう。

そんな中、主は弟子たちに命じられました。「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう。」(1章4節～5節)。弟子たちの間に、かねてからの期待が膨らみましました。ついに私たちの願いを叶えてくださるんですね、と。復活は認めても、主イエスの心は全く理解できないままでした。

主は言われました。「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となるであろう。」(8節)「わたしの証人」とは、主イエスが十字架で死なれたこと、3日目に復活されたこと、そして再び来てくださることを証言する人のことです。この後、聖霊は確かに降りました。自分の願いが叶うことにしか思いが向かなかつた彼らの期待を超えて、神の計画が始まっていったのです。

教会が今日まで立ち続けてきたのは、使徒たちに聖霊が降った後、復活の主が彼らを遣わし、新たな人々を教会に招き、出会い続けてこられたからです。私たちは彼らのように、復活の主をこの目で見ることはできません。しかし、復

活の主は昇天以降、教会において、聖霊によって私たちと出会って下さいます。

私たちの多くは、人生のある地点でキリスト者と出会い、教会に招かれ、礼拝で主イエスの話を聞き、主イエスと出会ったのではないでしょう。礼拝において、私のことを知っていてくださる方、十字架についてまで私を愛して下さった方と出会い、この方に全てを委ねて生きていきたいと思うようになった。私たちは、教会の礼拝で御言葉に聞く時、聖霊の導きによって、今も確かに生きておられる復活の主と出会い、信じる者へと変えられていくのです。

聖霊は、教会を新しい業へと導き続けます。サマリヤや地の果てには、使徒たちが絶対に関わらなかったサマリヤ人や異邦人がいました。使徒たち自身にはユダヤ人以外の所に行く計画など全くなかったのです。しかし、聖霊がそれらの人々と出会わせ、心の壁を砕き、新しい業へと導いていきました。

主イエスが天に上げられた後、使徒たちは地上に残されました。私たちが復活の主に出会っていただき、洗礼を受けて聖霊を注がれた後、この地に生かされるということは、主に委ねられた使命、復活の主の御心と結び合わされた新しい命の使い道があるからです。

主イエスは「エルサレムから離れないで」(4節)とお命じになりました。エルサレムは、彼らが一番離れたかった場所だったはず。自分たちの熱意が挫折した場所だったからです。しかしだからこそ、自分の力を捨て、神に期待し、祈ることしかできない場所でした。主は言われました。そこから離れるな。そこで待てと。使徒たちはエルサレムから離れず、祈って待ちました。聖霊は降り、彼らの思いをはるかに超えて、神が出会おうとなさる人々の方に導かれていきました。

テオピロよ。私たちの名を呼ぶ主イエスのみ声が響いています。エルサレムから離れるな。そこで私に祈れ。私があなたの主。大阪教会を立て、あなたがたを選び、ここに招いた主だ。私があなたがたに聖霊を注ぎ、遣わす。再びこの地に来る日まで、私があなたがたを用いるのだ。

(記 本庄侑子)